

孫子ほか中国故事に学ぶ

是(こ)の故に、智者の慮は必ず利害に雑(まじ)う。利に雜りて而(すなわ)ち務めは信(まこと)なるべきなり。害に雜りて而ち患(うれ)いは解くべきなり。 孫子

今月は、ビジネス書としても人気の「孫子」を取り上げてみました。大意は、「こういうわけで、智者の考えというのは[一つの事を考えるのに]必ず利と害とをまじえ合わせて考える。利益のある事にはその害になる面も合わせて考えるから、仕事はきっと成功するし、害のある事にはその利点も合わせて考えるから、心配ごととも解消する」となっています。(金谷 治訳注「新訂孫子」岩波文庫より)

この言葉は、物事に対処するには、その利害得失をよく見極めよという趣旨と思われるかもしれません。そんな事は当たり前と思われる方がいるかもしれませんが、一旦「利」の方に目がいってしまうと、自分に都合の悪い情報には、ついつい目をつぶりがちになってしまふのが人間の心理です。これを心理学の用語では、「正常性バイアス」といいますが、我と我が身を振り返ってみても随分と思ひ当たる節があり、その度に後悔するのですが、なかなか孫子のようにはいかないものです。私事であれば、笑い話で済ますこともできますが、仕事においては、組織や多くの方々に関係することですので、この孫子の言葉を胸に刻んで、今後も精進すべき必要があるものと考えています。

一方で、「利」と「害」というものは、一方的に「利」であるものや「害」であるものは少なく、コインの両面のように「利」の裏には「害」があることが多いのではないのでしょうか。例えば、「ハイリターン」のものには「ハイリスク」が伴うように、まさに孫子の言葉にあるように「利益のある事にはその害になる面も合わせて考える」必要があるというわけです。

また、人や物ごとに対する見方や考え方は、人それぞれであり、ある人が肯定的に評価したとしても、他の人はそれほど評価しないということはよくあることです。例えば、猪突猛進型の人に対して、その時々状況にもよりますが、「やる気がある」と評価する人もいれば、「危なっかしい」と評価する人もいます。したがって、「利益のある事にはその害になる面も合わせて考える」には、一人の意見ではなく、なるべく多くの叡智を集めて決めていく必要があるものと思われまふ。

今まで話してきたことは、短期的な事柄に関するものでしたが、長い人生を俯瞰すると、「人間万事塞翁が馬」あるいは「禍福は糾える縄の如し」という故事が思い浮かびまふ。どちらも人の幸や不幸は、一概には決められず、幸福だと思っていたことが、不幸に繋がったり、不幸だと思っていたことが、後々に成功に繋がったりすることがあるというような意味です。このことに関して、そういうことであれば、頑張っても仕方ないと一種の諦念を抱かれる方が、もしかしたらいるかもしれませんが、この故事は、そのような運命論的なことを説いたものではないと思います。

日本にも「勝って兜の緒を締めよ」という諺がありますが、これらの故事については、幸福な時も驕り高ぶるようなことは自ら戒め、不遇と思われる時も、くさったり、投げやりになったりせずに、自分のできることを誠実に行うことが、長い目で見た場合、その人の人生の成功に繋がるというふうに、前向きに解釈すべきものではないかと考えまふ。

最後になりましたが、関係各位におかれましては、来年度もご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

令和8年(2026年)3月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡明